

(案)

## 第1回瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議 議事録

▽日時 平成27年7月30日(木) 9:30~12:00まで

▽場所 瀬戸市役所庁舎4階 庁議室

▽出席者(順不同、敬称略)

[瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議基本構想審議会委員]

横井暢彦、寺田聡、水野貴久枝、丹羽誠、山中俊博、熊谷由美、中桐 淳美、山田基成、水野和郎 岡崎信久、牧治、杉山仁朗(成田一成委員代理)

[市]

瀬戸市長 伊藤保徳

副市長 青山一郎

行政経営部長 加藤仁章

行政経営部 参事兼経営課長 高田佳伸

行政経営部 参事 涌井康宣

▽欠席者(順不同、敬称略)

[瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議基本構想審議会委員]

宮内美穂

▽議題等

- (1) 市長挨拶
- (2) 委員委嘱
- (3) 瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議の開催要綱と傍聴要領について
- (4) 瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定内容について
- (5) 瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の立案に関する意見交換
- (6) その他

▽議事内容

議事に先立ち、事務局から各委員の紹介が行われた。

### 1 市長挨拶

- 当会議委員として選任した13名の方々の委員就任に対する快諾について感謝申し上げる。
- 今年度は、本市の最上位計画である第5次総合計画は今年が最終年度であり、次期の第6次総合計画を策定する節目の年である。そうした中で5月1日に私が市政を受け継いだ際に、第5次総合計画の総括や次期の第6次総合計画の立案には、これまで以上に市民の声を聞いたうえで市民意見が反映されたものとすべきとの判断から、第6次総合計画の策定期間を1年延期したところ。
- それに伴って、本年2月から3回にわたって開催してきた第6次総合基本構想審議会を終結していただいたが、将来人口への考え等の成果は、新たな計画づくりに受け継いでいきたい考え。
- 一方、地方創生を旗印に全国の地方自治体で策定が進められている総合戦略は、人口減少、日本の産業をどうするか、少子化の中で子どもたちの教育をどうするか、を地方自らが解決する手法を立案することが求められている。そこで、本日からスタートする「ひと・まち・しごと創生推進会議」を設置したが、この場の検討は、来年から4年間どのような取り組みを実現していくのかだけでなく、第6次総合計画の水先案内人・ガイドにも繋げるものとして、大胆かつスケールの大きなお話を期待したい。

- 委員の皆さまの中には、既に各フィールドでの調査や情報収集などをしていただいていると聞いており大変心強く思っている。
- なお、国からは来年3月までに策定を求められているが、事務局には今年中に作成するという大変タイトな指示をした。そこで、「ひと・まち・しごと創生推進会議」は、前半はアイデアを出し、それを踏まえたうえで方向性の絞り込みをする手順で、計4回で完結していただくことをお願いしたい。
- よろしくお願ひしたい。

## 2 委員委嘱

各委員への委嘱状の交付がなされた。

## 3 瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議の開催要綱と傍聴要領について

- 事務局から資料-1「瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議開催要綱」の説明がなされ、同要綱の規定に基づき、第1回の座長に牧治委員が指名された。
- 併せて、事務局から資料-2「瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議傍聴要領」（案）の説明がなされ、委員全員の承認を得て、同要領を決定した。

## 4 瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定内容について

## 5 瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の立案に関する意見交換

- 議題4と5は関連があるため一括で議事進行。
- 事務局から資料-3「まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定にむけて」の説明がなされ、以下のとおり意見交換を行った。

〈牧座長〉

座長： 本日は、アイデアを出していただきたいと思う。ブレインストーミングのように、どんどん出していただいて枯渇するまでやりたい。順番に発言をお願いする。

〈杉山委員〉

委員： 私は瀬戸に来て21年目。暁工業団地で働いている。会社として、社員の視点、工業団地の視点で考えると、具体的な話としては働く場というより、むしろ、子育てをしやすい環境、出産しやすい環境について意見を述べる。今は、熟練パートさんが子守りで辞めてしまう。今の夫婦は2馬力で働き、その間、子どもを保育園に預けるか、おばあちゃんに頼む。予算がとれば団地内、企業内に保育所をつくりたい。お父さんでも、おばあちゃんでも、お母さんでも連れて帰れる。2人目になるとだいたい女性は辞めてしまう人が多い。1つは企業内保育を行政と取り上げて、支援して欲しい。1社でキープできないのであれば、団地の中で。これは長年の懸案、これを機に実現していただきたい。

〈丹羽委員〉

委員： 瀬戸市のまち・ひと・しごとを考えると、陶磁器産業を柱として欲しい。陶磁器産業はかなり多くの分野で瀬戸の将来に貢献できる。大都市への人口の集中の中で、他の市との差別化を行い、人を惹きつけるということを考えたとき、陶磁器産業を外すべきではない。瀬戸への新しい人の流れについて、年に数百人という人が集まる。訓練校、窯業高校、愛知県立芸術大学など、このような若い人が毎年陶器を学びに、瀬戸市内に入ってくる。しかし、残念ながら卒業すると出て行ってしまふ。そういう人を雇うこと。その人たちには起業したい人がたくさんいるので起業を促すことが考えられないか。例えば、瀬戸駅の近く陶本町、

元町には空き家がたくさんあり、非常にもったいない。そこに住んでもらい、ギャラリーや工房を作り、安く貸し与えるということができないのではないかと。そうすると他から観光に來たり、あるいは市民の散歩道になったりする。

安定した雇用創出という点では、瀬戸焼きには誤解があり、もともとは高価で上品なものであるのですが、安いものと思われがちなので、誤解を解けるようにする。去年、東京の南青山で、瀬戸焼きブランド発表会を行い、多くの反響があった。その影響で来月には新宿の伊勢丹で瀬戸焼きのPRができる。PR次第で、産業として変わっていく。瀬戸の瀬戸焼きのPRをして、人の雇用を増やす。

瀬戸の窯業は、ファインセラミックス等もある。碍子もある。特にファインセラミックスは今後の重要度も大きく、研究開発への助成、転換への後押しをすることの策を取っていただければ、人が増え、雇用がつくられると思う。

現在、瀬戸は公共の空白地が多く、名鉄瀬戸線沿線はいいが、郊外は交通の不便なところも多く、循環バス等の整備をしていただけるといい。将来的にコンパクトにしていくためには、小さな拠点という観念では、名鉄瀬戸線の駅周辺、環状線に人が集まるようにしてもらい、郊外の方では、工業ができる所にし、それより奥は自然環境として、観光名所として整備していってもらえたらと思う。

〈山中委員〉

委員： ガラスの原料に携わっている。この地域は良質な原料が出る産地である。瀬戸地区のガラスの原料は国内の80%近いシェアを誇る。今まさに第三次産業革命が起ころうとしている。3Dで何でも作ってしまうという時代。若い人は、働く場所が無いと集まらない。第三次産業革命が起こるなかで、今の若い人は、そういう世界に入る機会も多い。東大でも、起業する人が多いと聞く。事業に興味があると聞く。働く場所として瀬戸は立地としていい。我々の地場産業も大事にし、新しい産業を呼び込めるようなまちづくりをしてほしい。

女性に聞くと、医療と教育が充実しているところが、安心して住めるまちと聞く。瀬戸市は陶生病院という立派な病院を構えている。看護師がやっている仕事の60%の業務がモノを運ぶ業務であると聞くが、トヨタ自動車のようなノウハウを病院の医療に活かしたら良い病院ができるのではないかと。個人医院が9万あるので、連携することにより、安心してまちの病院に行けるようになれば随分かわってくると思う。この地域には大学もあるため、医療と教育を充実させることで、若い人も集まるのではないかと。集めるために、夢みたくことを考えてやっていくことで、うまくいくのではないかと。思う。

ITデジタル化で公共工事も就労の人口がこれから半分以下になると、ICT、無人で何十万と随分変わってくる。長寿の時代を迎え、どう仕組みをつくっていくか、働く場所、住む場所、環境、瀬戸市全体の区分けをしていくとよい。

〈岡崎委員〉

委員： 瀬戸は伝統的な産業もある、コアな技術を守るべきだと思うが、一方で企業として市にどう貢献しているかという見方をしたとき、一定の選択と集中はどこかでしなくてはいけない。まさに今のタイミング。市が潤わないと、市民が安心・幸せになっていけない。

安心して暮らせるという部分では、尾張の東部エリアは、災害の視点ではすごく安全な土地柄である。名古屋の西側はゼロメートル地点もあって、被害の予想もされる地域も多いので、集団的な移住も視野にいれることが、1つの手かと思う。

子育て、人口を増やすことの前にきちんと結婚をして、子どもをつくり、その子どもたちが、瀬戸に住み続けるということで、瀬戸を継続的に守っていくことが必要。今、日本の社会で非正規雇用者が多くお金が無くて結婚できない、ということも要因の一つでもあるので、例えば瀬戸の会社は、全て正規社員で雇用します。年収は保証します。ということができれば、1つ問題がクリアになるかと思う。社会人になって、大学でいったん外に出るのが要因かと思うので、瀬戸の企業は、中卒でも高卒でも大卒でも学歴は気にせず、仕事ができ

る人たちには給料を支払い、生活できる環境を守っていくことで、その次の結婚、出産、子育てに繋がるのかと思う。

〈中桐委員〉

委員：瀬戸出身ということで、働きながら子育てをした一市民。自分自身、大学は外に出て、故郷に戻った。ちょうど子どもが大学4年生で就活していて、親子で話す機会があった。長く働き続けて家庭をもつには、という視点でご意見できればと思う。

現在、各市町村が戦略を策定するため、各市で人口を取り合うことになる。結果、戦略で、最終的には地方が疲弊するのではと思うと、いかに定着をさせるか、ふるさとで暮らすことがいかに豊かな生活がおくれるか、ということ解らせることで、選択できるのではないか。この地域は働く場、住む場は恵まれていると思う。医療、教育において、瀬戸市は医療機関が大変多く、お稽古ごとくも数多いという印象。昨年度、国保年金課にいた経験からすると、高齢者が多いということで、医療費も負担になっていると思われるが、瀬戸市は他自治体と比べて医療費は大変低い状況。比較的健康的に暮らされている。恵まれているという状況をどれだけ理解しているのか。むしろ、大学で外に出た人が、戻って来ることができないということも見てきたため、何か施策がないかと思う。娘が東京の大学にいと、友達が東京の就職先と知り合いがいるから名古屋に行こうかな、といわれる方もいるので、第1の故郷、大学での第2の故郷、働く第3の故郷、外から第3の故郷事業があってもいい。

あと、暮らしに安心を実感ができる、防災上いい状況の実感をさせる、交流の場をつくること。例えば、東北の市長さんが、「よくぞ故郷に戻って来られました」とあいさつからはじまる。外に出た人たちが故郷で一日同じ時を過ごす時が瀬戸にあるのかな、と思うと成人式くらい。様々なお祭りがあるが、元の故郷をもって瀬戸に立ち戻るといった仕組みを考えてこなかったのではないか。現状を知ってもらうこと、機会を逃さないこと、市民の人にわかってもらい、納得してもらって生活してもらうということ、故郷を思うという場をつくること、を考えていけたらと思う。

〈山田委員〉

委員：私自身は産業、企業の研究をしている。p15の論点の真ん中の○(丸)が9個ある。同時に考えなければいけないが、どこから取り掛かるか考えたとき、まずは出産や子育ての前に結婚がある。右側、働く場が無いことにはどうにもならないので、この2つ。結婚しやすいことを考えると、問題なのは、未婚化・晩婚化。社会の流れとして仕方がないが、瀬戸市の婚姻率推移男性と女性を見ると、35歳～39歳は1980年代男性92.3%が結婚していた。今はどうかとみると、男性59.9%となった、女性71.9%。それぞれ落ちている。ただ、35歳～39歳になった時女性は7割結婚しているが、男性は6割切っている。ここが象徴的。十数%の男性は結婚できていない。その原因がどこにあるのか議論する必要がある。産業構造が原因で瀬戸市だけでなく、自動車等機械工業である。男性中心の職場で愛知県自体も男女差があります。男性100人について、女性89人しかおらず、男性11人は自動的に結婚できない。自動車機械中心の産業構造の中で、ハード主体の産業から、ソフトを取り入れていかないと、世界との競争に勝てない。ソフトウェア関連の産業を充実が必要。実はそこには仕事はたくさんあるので、政策的に作り出していくこと。瀬戸市に限らず、この地域の重要課題で、ソフトウェアは女性でも頑張っていただけの職場である。

〈水野和朗委員〉

委員：6月に新しい国の総合戦略の基本構想、基本方針が出ている。人口構造、東京一極集中、地域経済の現状について、瀬戸市に置き換えると、自然減が17年から既に始まっていて社会減がマイナス、瀬戸市は既に始まっている。

東京一極集中を、瀬戸市について考えると、名古屋駅一極集中ではないか、豊田もあるが、そんな感じが見受けられる。地域経済については、瀬戸に置き換えると、大都市豊田市名古屋市に比べて遅れているのが現実的。各地域における観光づくりが書かれており、農業生産

現場の強化、瀬戸は遊休農地があると認識している。2015年版の日本版 CCRC についても、活性化方策としての考えもある。働き方は、色んな働き方を考えるとよい。最後にまちづくり、空き家対策、小さな拠点、集落の維持、流出による人口のところ、名古屋に圧倒的に負け、長久手、日進に負けている。長久手市などは2050年まで人が増えるという地域。交通の利便性を瀬戸市では考えていなければまずいと考える。

〈横井委員〉

委員： まちづくりを中心に活動。PTAをはじめ、地域力、瀬戸のキャリア教育、現場だけでなく自分の事業の中でも实际的な子育て支援をしてきた。

瀬戸は国定公園定光寺等、素晴らしい自然に囲まれている。教育でいうと、瀬戸のキャリア教育、かなり教育に力を入れてきて文科省からも経産省からも表彰受けている。また、伝統文化は言うまでもない。医療機関も瀬戸市は進んでいる。災害に強い地理的な条件も、生涯学習もキャンパスがあって学習が展開されていて、意識が高い。伝統文化もあり、瀬戸は他にない素晴らしいまちだ、ということを抑え、話を進めていかないと暗くなってしまう。

子育て支援については、いろいろ手当がありますが、本当の支援って何か。手当をあげるのか。未来ある社会、まちづくりをつくっていくことが、安心安全なまちをつくるのが女性の支援になるのではないかと思う。

人口減少という点では、女性の人口流出。女性はどちらかといえば新しい家族を築く場合は、瀬戸ではなく、外に選択を求めることが雰囲気としてある。女性がこのまちで、留まり環境をつくるのが重要。女性に対する子育ての支援が、1企業でできることもたくさんある。例えば、当社は子どもを連れてきてもいい、というシステムを22年間やっている。時間も自由。やったらやった分の能率給という仕組みもある。家庭と仕事どちらも大事なので、働きながら子育てができるという環境を企業の中でつくること、男性視点ではなくて、女性視点で考えれば当たり前かもしれない環境をつくるということが重要。人出不足で、働く場所はいくらでもあるため、女性を留めるために元気に働いてもらうことを、提案させていただく。起業については、30年間の企業が存続する%は低く、ほとんどの会社が無くなる。起業について進めるべきか疑問がある。起業よりは、女性が自由に働ける環境づくり、意識を変えることが必要である。

〈寺田委員〉

委員： 陶芸家としての意見だけでなく、地元のPTA、消防団、5次総の委員、愛知県商工会議所青年部、などでの意見を述べさせていただく。

安定した雇用の創出については、地域のメリットを活かした企業誘致による雇用の創出。東海沖地震等の強化対策地域で、国が認めた安全な地域が瀬戸。逆に東海環状自動車道、第2東名等をメリットとして、企業の災害時の事業承継が必要とされている時代のため、全面的にだした企業誘致を行えばどうか。それに対し、地元の雇用比率に対しては、固定資産税などの優遇を視野に入れ誘致活動をしたら、企業に来ていただけたらと思う。

東部丘陵地域など埋め立て地域の活用として、農業も含めた誘致をするのはどうか。中心市街地のシャッターが閉まっている所や空き家で、商店街型アウトレットモールの誘致をしたらどうか。栄から30分で三井アウトレットモールのような、企業と行政がコラボ連携したアウトレットモールにしてしまう。そこで店舗や雇用の創出、近隣駐車場も含めた、様々な雇用ができるのではないかと。

観光客の誘致も雇用を生む。瀬戸の強みの見極め、顧客の絞り込み、継続的な試行錯誤をもとに観光誘致をしなければならない。瀬戸のまちは瀬戸物という名前が有名ですが、瀬戸物は安いイメージ。瀬戸物祭りで売っているものが、実は美濃だったり、中国製だったり。瀬戸でつくられたものを買ってもらい、その整理が必要。

瀬戸焼き、ブランドの構築があるが、有田、伊万里に比べると、知名度が低く、ハードルがある。そこで本物の瀬戸物ということで、売りだすことはどうだろうか。美濃の瀬戸物はニ

セモノの瀬戸物。本物志向が根付いているのでそれを売っていく。あとは海外に売らせていく必要がある。ファインセラミックも瀬戸の名前をつけて売り出していくべき。

観光で来た人の宿泊場所が無い。バックパッカーが泊まれる場所をつくる。空き家をバックパッカーが泊まれるようにし、瀬戸を拠点に移動行動してもらおう。

若い人がなぜ田舎にやってくるのか、1つの原因として、近所づきあいがある。お年寄りの多い地域は町内会には必ず入ってください、と強要の部分がある。若い子は SNS で回覧板はメールできてしまう時代で、近所づきあいは必要最小限でいいと思っている。地域の中での新しい組織のありかたを再考していくべき。

インフラの整備、大胆かつユニークということで、丘陵地帯をゴンドラで結ぶ整備はどうか。昔は、材木を運ぶケーブルカーがあったので、その発想で赤津までケーブルカーであり、観光地の整備をしたらどうか。

子育て特区として、差別化をはかることが重要。時代にあった地域をつくる。キャリア教育が小中で終わってしまっているの、高校で地元企業との繋がりをどうつくるか。防災上も高校生はもう大人なので、災害時にも地元で活躍していただけるメンバーだと思うし、高校生は他地域からも来ているのでそこにメリットもあると思う。

〈水野貴久枝委員〉

委員： 9歳の息子がおり、その子が外の大学へ行き、帰ってきてくれるにはどうしたら良いか考えて話したいと思う。

瀬戸市の人口について、4月から広報が見やすくなった。去年からみると429人減っていると記載されていた。出生率を上げれば人口が増えることがわかった中で、子どもを産み育てる、という最も基本的な状況において、人間的に欠けている若い子が多い。それは何かというと、「子どもが嫌い、赤ちゃんはいらない」という若い子が多いのである。実際私も働いているときは、結婚なんて絶対しないし、独りで生きていけるし、結婚してからも、もうちょっと遊びたい、仕事ももうちょっとしたい色々体験したい、子どもができたらそういうことができない、仕事を辞めないといけない、子どもはいらないと思っていた。実際に子どもがいらないと思っていると、不思議と子どもができない身体になってしまうと産婦人科の先生に言われ、治療してやっと1人授かった。基本的に子どもが好きじゃないというのは、どうしたら治るのか。友達からおもしろい取組みを聞いた。赤ちゃんを学校に連れて行く事業があるということ。キャリア教育ではないが、赤ちゃんに触れる時間をつくって、子どもを好きになってもらうことが重要で、教育にもつながるのではないか。

子どもが少し大きくなったときについては、瀬戸市のどこで遊ぶか。交通公園は30分で充分、9歳になると、市民プールでは物足りない。だからよそに遊びに行ってしまう。最近では瑞浪サイエンスワールドにはまっている。瀬戸で1日遊べる場所があるとよい、できれば、全天候型のものがあるとうれしい。

高校生になったときについては、瀬戸には勉強する場所が無い。春日井では会議室で自主勉強ができ、みんなが空調の聞いた中で勉強している。同じ環境・勉強できる環境がある。今はパーティの3階位しかない。場所取りをしている。マックやスタバで勉強しているのでそういった所があればいいと思った。

〈熊谷委員〉

委員： 今、教育委員会において、学びキャンパス等を経験したこともある。学校を核とした地域の交流、活力などのアイデアを考えてきた。

生涯学習を経験して思ったのは、瀬戸には学びキャンパスで学びたい人、教えた人が沢山いる。ただ講座に来ない人も大半いる。どうしたら来ない人たちが機会を得られるか考えたところ、それは学校ではないかと思った。興味のない子どもたちにも歴史を学ぶ総合学習の時間に来てもらう。地域の素晴らしい人に出会う、そんな場にするといいいのでないか。地域の人たちも学校を通じて、子どもや孫がいなくても、自分たちも地域の子どもたちと一緒に

に育っていこうという視点を持ち、様々な人がボランティアで学校を支援する方法、半ば強制的に体制をつくれるといいのではないか。学校の支援や部活動の支援、本の読み聞かせや、料理上手な主婦の調理実習の補助等。時間がないお母さんに家庭料理を教える機会がないのではないかと感じているので、地域の高齢者の力を取りこんで、瀬戸おばあちゃんの家庭料理教室というような形で。核家族で人とあまり触れ合っていない子どもたちに、より素晴らしい人生の先輩達に出会わせる機会をつくるのも1つ。第2の人生の地域デビュー講座、子どもを中心に自分たちがボランティアで関わっていくことが大切である。

〈牧座長〉

座長： 様々なご意見をもらった。言い足りなかったこと、具体的なことを挙手で願います。

〈杉山委員〉

委員： 高齢者対策、高齢者が住みやすいまち。具体的な例であると、20年前に当社は瀬戸に来て、大きなイノベーションをやろうと、66歳定年をやった。時間をかけてくると、部下が高齢者を尊重し、高齢者も何のためにやっていくかがわかっていき、融合した。まちの中でこれをやっていかなければいけない。

県外からも人を採っているが、その人たちが50~60歳位になると、7~8割が、親の介護で帰ってしまい、逆Uターンでベテランの労働者がいなくなってしまう。この人口流出が大きい。親をこちらに連れて来る、この人たちが瀬戸の人になって帰らないようにしないと、片手落ちになってしまう。

もう1つは、食生活の変化が大きく、出来上がった食品、外食が増えてくる。お弁当とおにぎり、今売れているのはお惣菜。これらはプラスチックの入れ物です。これは瀬戸市として由々しき状況。食器を使わなくていいということ。この地区でお皿に盛るという運動をしたらどうか。せめて器くらいは瀬戸物にしよう。お父さん、お母さんのお茶碗、自分の湯飲みと決まっている文化は日本だけ。そのことを活かしながらも、瀬戸市でこういう運動を興してしてほしい。実生活に入れ込んでほしい。

〈横井委員〉

委員： 子育ての関係で、最終的には税収を増やすこと。どうしたら税収を増やせるか。高付加価値の商品の開発です。高付加価値の商品の開発の場をつくるということのも大事です。瀬戸には沢山の産業が落ちています。焼き物だけでなく、名だたる企業があり、みんなでシェアしながら、瀬戸に来て働くという環境をつくるのが非常に大事。

日本食も無形遺産になりました。食べ物と一緒に器も世界遺産にならないか。実際になるかわからないが、1つの運動として、それには日本全体が取り組むべきところで、色々な他市町や県から協力を得て、使う器だけでなく、器に関係するところの茶道や花弁でも伝統文化や、焼き物を学校給食のなかで瀬戸物を使う、という新しい展開を考えていければいい。デザインの部分でも金沢でも東京でも焼き物のデザインを手がけているところと一緒に提携しながら、瀬戸市は工場に徹底して、物づくりのまち、職人のまちなのでそこを勘違いしないで、しっかり進められたらいいのでは。

〈牧座長〉

座長： 確かに焼き物を主体としたまちづくりは不可欠である。焼き物の価値が無くなったのではなく、活かし方が見えてないのではないか。いつも思うのが、旭山動物園。動物の見せ方が悪かったからで、焼き物がだめなのではなく、焼き物の見せ方がダメなのじゃないか。瀬戸物の定義は。瀬戸物は、瀬戸でつくったものなのか。イコール焼き物なのか。外の人からみたら、有田でつくった瀬戸物であり、美濃でつくった瀬戸物であり、なんでも瀬戸物。あくまで瀬戸でつくったものが瀬戸物であるとこだわっていくのか。日本中にPRして香川県のように、瀬戸物市とうたうとか。何でもいから瀬戸日本一みたいな言い方見せ方があるのでは。美濃陶芸美術館のようなナンバーワンを自負していますが、その10倍くらいの商品をつかって、世界一というパワーや自信を持てるようなことを打ち出して欲しい。

〈丹羽委員〉

委員： 私はもともとガイシやファインセラミックスの企業で、オールドのセラミックには無縁であった。去年の5月から本物の瀬戸物に触れることが多くなり、オールドセラミックに関わるようになった。それまでの感覚とは違い、本来の瀬戸物は高価なもので、パリ万博等では、瀬戸の染付を見て、世界中の人が感動した。ところがそれが、昭和のある時期に、安いものを大量に要求され、残念ながら安いイメージがついてしまった。今は時代も変わり、メーカーは淘汰されて、そんなことはできない。時代も要求していない。長く良いものを愛用したい、そういう時代になった。それに気が付く人は気付いているが、多くの人が気付いていない。瀬戸の陶芸作家等の人の技術力はたいへんなもの。そういうものを全面に出しながら、瀬戸の人を引き付けるのが可能。そこを大事にし、今後の瀬戸を考えていただければと思う。

〈山田委員〉

委員： 陶磁器を中心に産業の話になった。この地域としては、窯業がベースであるのは、おっしゃるとおり。ただし、製造品出荷額の1割です。電気・機械の方へシフトしているということ。愛知県は経済活動では最も元気で、その要因としては、40～50年前の繊維産業が自動車や工作機械へシフトしたことが、盛り上げた。これから先、それに頼っているのかというのが地域の議論。窯業の方が、瀬戸焼きを大事にしながら他の産業に幅を広げていくことができるか、どういったサポートが必要なのか、と私自身は思っている。若い窯業の後継者の方が、狭い範囲で、デザインや開発、というところから、少し視野を広げることを考えて、政策的に設ける勉強するなどいろいろありますが、地域経済の活性化につなげてほしい。

〈水野和朗委員〉

委員： このような会議はロジカルにやってほしい。基本方針や基本的方向は、国でいっているのはp9の基本目標の4つで、まちとして基本的に4つでいいのか、他に何かやるべきことがあるのか。片方で人口、片方で子育てとなっていますので、今日、次回はこれをしましよと決めていただくといい。そうすると議論がかみ合ってくると思う。

〈牧座長〉

座長： ありがとうございます。今日に限っては、第1回目ということで、色々言っていて、どんな意見でもいいので、抽出していきたいと思っている。

〈丹羽委員〉

委員： 瀬戸の窯業は、ファインセラミックスもある。統計を見ますと、瀬戸から外に出てしまったものも多い。もし、瀬戸に残っていたら違った状態になっていたと思う。転換をはかっていることもあり、それが外に出ないようにすることも必要。

〈牧座長〉

座長： 瀬戸はそんなに悪いまちではない、そこそこのまち。まだまだ自虐的なところがある。みんなが駄目だと思っていることを払拭しない限り、子どもにこんないいまちだから、と伝えられない。みんながいいまちだと言っているから、子どもたちが住みたい、となるのであって、そこそこのいいまちを、本当にいいまちということを思ってもらう。瀬戸に移住してもらって、瀬戸はこんないいまちだということになれるよう、案を出して欲しい。もっと愛着をもってもらうためにはどうすればいいのか、その中で雇用創出があったり、人口定着があったり、まだまだあると思う。

〈水野貴久枝委員〉

委員： 若い人たちは名古屋に出て、結婚し、子どもが小学校に上がる頃、そこに住むのか、瀬戸に戻ってくるのか検討すると思う。できれば私は瀬戸に戻ってきてほしい。犬山のふるさと犬山市ふるさと定住促進サポート事業、親と一緒に住んだら60万円、近くに住んだら20万円、新築リフォームの費用をというものがあるらしい。実際お金を出せばいいという問題ではないが、例えば、瀬戸においでよと、希望の保育園に入れる、さらに補助金をもらえるからあ



りがたい。財源に限りがあるが、計算してみると、60万円くらいなら5年住んでもらって住民税で元が取れる。それくらいの予算だったら出るのではないかと思った。

主婦目線で行くと、お母さんは働きたい。北陸では、インター近くの物流センターで、パートさんがたくさん働いており、保育園は無料らしい。この近くもインターがあり物流もよい、多治見のアマゾンもよい。母さんも気軽に働ける企業を誘致して欲しい。女性の立場からいうと、お母さんが働く企業内に保育園を作ると、子育てをお母さんがやらなければならないので、送り迎えもお母さんとなるので、できればお父さんの会社の保育所もと思う。できれば社内結婚で定住してもらえるといい。

〈牧座長〉

座長： 社内恋愛をしてくれるといい。四国の晚餐館は社長が仲人する。そうすると、次の子どもたちがその会社で働いてくれる、近くに住んでくれる、いいことだらけということ。

〈杉山委員〉

委員： 色んな結婚式を考え提案するような場所を作ってもいいのではないかと思う。ホテルでやるのは無くなってきている。

〈寺田委員〉

委員： 商工会の青年部で、瀬戸恋招き事業をしています。岡山で1,000人対1,000人をやり、全国に広がって、瀬戸市の40人対40人のネット応募を夜12時にかけて、2時には埋まってしまふ。会議所がやっているというのと瀬戸市後援というのがあるので、信用があり、親も応募してくる。男女は知り合いたいし、結婚したい、出会いたいという願望があるが、出会いの場が無い。そういう場を創出していく、プラス民間がやったとしても、民間の会社に責任+行政というシステムを作れば、意外に若い子の出会いの場の創出になり、これで10組以上が結婚しているので、場所を作ることで、結婚して子育てをするまちをつくっていいのではないか。

〈岡崎委員〉

委員： ソフト開発については、まちより山の方がいい開発ができる。瀬戸は両面をもっているのいいと思った。日本中で人口の取り合いをしても仕方ないので、優秀な外国人を含め誘致、安価な制度ではなくて、瀬戸に住んでもらえるグローバル人材までを誘致できるのでは。

〈水野和朗委員〉

委員： 日本中の市町村が同じものをつくっている。人口問題で瀬戸が勝ったら、長久手と日進が負けるだけの話ではいけない。

〈牧座長〉

座長： 東京から連れてこなくてはいけない。魅力のあるまちに。市長がテーマ、キャッチフレーズを決めていただきたい。日本一何々、なんでもいい、差別化ですから。高齢者が住みたいまちをつくる、ヤキモノの産業イメージは作れる。日本一の作成、瀬戸はこんないいまちと市長につくっていただきたい。

次回は、形をつくりあげて、アイデアをつなげていきたいと思う。

- 市長から、第2回以降の座長に、2回目に水野委員、3回目に横井委員、4回目に山田委員を指名。
- 事務局から、第2回を8/25(火)、第3回を9/29(火)、第4回を10/30(金)とする報告。
- 併せて、事務局より、本日の発言以外に追加のアイデア等がある場合は、8月7日(金)までに事務局へ提出していただいた旨を説明。

➤

以上